

今日のお題はかの有名な漢の武帝による「秋風辞」という詩です。

この詩の内容に入る前に、作者の漢の武帝がいかなる人物か、というお話がありました。

漢の武帝は項羽と戦い天下を取った劉邦のひ孫にあたります。武帝の父親は景帝、祖父は文帝という共に優れた名君でした。

祖父である文帝は劉邦と薄氏という賢い側室との間に生まれました。劉邦には呂后という正妻がおり、劉邦は天下を取るために、妻の父親に助けられてきたこともあり、劉邦は生前正妻に頭が上がりませんでした。

しかし、劉邦は最愛の側室「戚」氏の子、如意を後継ぎにしたいと考えていました。劉邦亡き後、呂后は朝廷内を呂氏一族で固めようとし、戚氏と如意を殺してしまいます。しかも、戚氏へは積年の嫉妬を込めて、手足を切り落とし廁に入れ、皆に豚と呼ばせるという残忍非道なことをしています。呂后は息子の恵帝を立てますが、恵帝の後を継いだ二人の息子は、呂後の死後政争に巻き込まれ、不幸にして、即位後相次いで亡くなりました。複雑な跡目争いの末、ようやく劉邦と薄氏の息子である文帝が選ばれ帝位に着きます。薄氏は賢女らしく、呂后が猛威を振るっている間も陰に隠れて難を逃れました。後々三代続く皇帝が皆優秀なものも、特に武帝が文武両道に秀でた人物である事も、この母方の血を感じます(劉邦は田舎町のチンピラやくざ? の出でしたから)。

その文帝の孫、武帝は始皇帝と並び称される名君ですが、世界的には秦の始皇帝の方が有名ですね。Chinaの語源は秦のqinという国名から来ています。しかし、約400年続いた漢王朝の基礎を

qiū fēng cí
秋風辞作者 : hàn wǔ dì · liú ché
漢武帝 · 刘彻

qiū fēng qǐ xī bái yún fēi
秋 风 起 兮 白 云 飞
cǎo mù huáng luò xī yàn nán guī
草 木 黄 落 兮 雁 南 归
lán yǒu xiù xī jú yǒu fāng
兰 有 秀 兮 菊 有 芳
huái jiā rén xī bù néng wàng
怀 佳 人 兮 不 能 忘
fàn lóu chuán xī jì fēn hé
泛 楼 船 兮 济 汾 河
héng zhōng liú xī yáng sù bō
横 中 流 兮 扬 素 波
xiǎo gǔ míng xī fā zhào gē
箫 鼓 鸣 兮 发 棹 歌
huān lè jí xī āi qíng duō
欢 乐 极 兮 哀 情 多
shào zhuàng jǐ shí xī nài lǎo hé
少 壮 几 时 兮 奈 老 何

築き、ちっぽけな田舎町の名前だった「漢」を漢民族、漢字等、中華民族のアイデンティティを代表するビックネームに育て上げたのは他ならぬ武帝の功績なのです。

また、始皇帝は万里の長城を築き、異民族の侵入を防ごうとしましたが、武帝は長城を超え、西域に使者を送り、シルクロードを開拓し、東西の文化交流を図りました。

秦の始皇帝と違い、学問好きの文化人であった武帝は秦の始皇帝が焚書坑儒で徹底破壊した儒教を復活させ、国教と決めました。武帝が復活させてなければ、今日に至るまで世界中で『論語』が愛されている現実はなかったかもしれません。また、武帝は芸能好きで、楽府という部署を置き各地の民謡を集めさせたりしたセンスのある文人でもありました。そればかりでなく、大の女性好きとい

う一面もあり、以前^{りえんねん}李延年という人の「佳人歌^{かじんのうた}」を紹介しましたが、李延年の妹で絶世の美女李氏を愛したのもこの武帝でした。「英雄色を好む」の代表人物でもあります。こういうところに武帝の人間らしさを感じてしまいます。

さて、この「秋風辞」は地位も名誉も財産も美女も全てを手にいれ人生の絶頂期を迎えた武帝が盛大な地神祭りの最高潮の瞬間にふと湧き上がった老いの寂しさを歌ったものです。

秦の始皇帝も最後は不老不死を求めて蓬莱の国日本にまで使者「徐福^{じょふく}」を遣わせたりしましたが、権力者にも忍び寄る老いだけはどうしようもありません。

「最後の最後の一言が味わい深いですね。わたしなんかこの歳になると毎日この気持ちですが、あの漢の武帝も同じ気持ちを味わっていたのかと思うと、何だか安心するんですよね」

植田先生のコメントに一同大きく頷き、ハーッと吐息がいくつも重なりました。

老いの淋しさは万人共通ですね。まだ気分は若者のつもりでいる40代後半の私もいつの間にか老いの淋しさがわからない歳ではなくなったのか、この詩から伝わる武帝の気持ちが切なく胸に迫りました。

幸せの瞬間にふと忍び寄る淋しさの影、人の思いは民族を超え時代を超え、性別も身分も超えて普遍であることを感じた時に植田先生の「ほっとする」というお気持ちが少しわかったような気がしました。

夕方、静かに暮れ落ちてゆく鮮やかな夕日を眺めると、同時に迫りくる夕闇の暗さを感じる…あのなんとも言えない淋しさに似ている気がします。

さて、この詩は途中に「兮^{けい}」という合いの手のよ

うな意味の無い字が入っています。

これは、屈原から始まった楚辞のスタイルだそうです。現代中国語ではxī(第1声)と読みますが、昔はhaという音で読んだようです。「どうもxīという音よりハーッと詠むと気分が出るんだよね」と植田先生が「兮」を「ハー」で読んで下さったのを聴いて納得！

xīと言う短く鋭い音に比べて人の溜め息を連想させる「ハー」で読むことでその前後の言葉が浮き上がり、この詩のテーマである「老いの哀しみ」を一層掻き立てているように感じました。最後に項羽の辞世の詩である「垓下の歌」を先生がホワイトボードに書いて、武帝の詩と比較して朗読されました。

あまりにも有名な項羽最期の一句「虞兮虞兮奈若何！」(虞や虞や、若を如何せん)。楚辞の代表的スタイルで書かれたこの詩も「兮」という意味の無い置き字によって項羽の無念に満ちた悲しみを掻き立てられるのは気のせいでしょうか。

今回も漢詩を音で味わう楽しみだけでなく、詩が作られた歴史的背景、作者の人物像を知って想像をめぐらせつつ楽しめた贅沢な1時間半でした。

書き下し文

秋風起こりて白雲飛び、
草木黄落して雁南歸す。
蘭^{しゅう}に秀有りて菊^{ほう}に芳有り、
佳人^{なつか}を懐^あしみて忘るる能はず。
楼船^{ろうせん}を汎^{わたり}べて汾河^{わた}を濟り、
中流^{しゅう}を横^あぎりて素^あき波^あを揚^あげ。
簫鼓^{しょうこ}鳴りて權^あ歌^あ発^あこる、
飲^あ樂^あ極^ありて哀^あ情^あ多^あし。
少^{いく}壯^と幾^と時^きぞ老^いいを奈^い何^{かん}せん。